

法助動詞 *devoir* と *pouvoir* の陳述に関わる意味効果

—語用論的観点からの分析—

岸本 聖子

(立命館大学)

フランス語の *devoir* や *pouvoir* には、多義性分析により、伝統的に根源的用法と認識的用法の2つの意味が付与されるが、この二分法では説明するのが難しい以下のような用法が見られる。

(1) Si tu lances une pierre en l'air, elle *doit* retomber. (Kronning 1996)

(2) —Elle est très belle, elle est superbe !

—Elle *peut* être belle, mais elle n'est pas très sympathique. (林 1997)

(1)は一部の研究者により、*devoir* の真理的用法とされるもの、(2)は譲歩を表す *pouvoir* だが、これらの用法がどのような発話意図のもとに使用されるのかという観点からの分析はないようである。しかし英語学の世界では、法助動詞 *may* が言語行為的機能を表すことがしばしば言及されている (Sweetser, 澤田)。

(3) Admittedly the Earth Summit at Rio two weeks ago *may not* have achieved that much, but it did indicate that the world's nations cared about the preservation of our environment and its flora fauna. (澤田 2006)

この用法の特徴は、直前の文脈で事実として既定済みの事態について、改めて *may* を付与し命題を捉え直すというところにある。従って、根源的用法や認識的用法とは種を異にする様態の在り方が観察される。

本発表では、(1)(2)の意味について以上のような語用論的観点からの分析可能性を示唆する。従って、意味分類についての新たな議論は行わず、フランス語の *devoir* と *pouvoir* には、陳述に関わる一種のレトリックとしての用法が共通して見られるということをも明らかにしたい。